

ピリピ人への手紙1章27-30節 「共に奮闘」

1A 御国の市民の生活 27a

2A 一つになる戦い 27b-28

1B パウロとのチーム 27b

2B 福音の信仰 27b

3B 反対者への徴 28

3A 共に受ける苦しみ 29-30

1B 苦しみという賜物 29

2B パウロと同じ戦い 30

本文

ピリピ人への手紙1章 27 節から学びます。2 章 11 節まで行こうと思ったのですが、内容がとても深いので、27 節から 30 節までをじっくり読んでいきたいと思います。パウロのこの手紙での主題は、「主にある喜び」です。牢獄に入れられているという過酷な環境の中で、それでも喜んでいられるというのは、彼が「主にあって」喜んでいたからです。その環境について言うならば、喜ぶべきことは全くないですが、主との交わり、イエス・キリストとの結びつきであれば、むしろ大いに喜ぶべきことが多いのです。

パウロは、「生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。(1:21)」と言いました。自分の生きているこそ、そのものがキリストなのだという、キリストへの献身、その一途な姿勢が彼の心の中の喜びを支えています。そして、パウロはピリピの人たちに、勧めを行ないます。パウロは、キリスト者の生活というのは、戦いの生活であり、その戦いのために一つになって戦うことを教えます。

1A 御国の市民の生活 27a

27a ただ、キリストの福音にふさわしく生活しなさい。

ここの「ただ」というのは、「もっぱら」という意味です。新共同訳では「ひたすら」と訳されています。そして、「キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」とありますが、これは意識で、引照のところにある「御国の民の生活をしてください」というのが、もっと直訳的です。ここが、"politeuo"というギリシヤ語が使われており、ギリシヤの都市を表す「ポリス」に基づいています。英語で「政治」を「ポリテックス」というますが、ポリスは都市であっても、それ自体で国家と同じ単位になっている、つまり都市国家ということです。ですから、「御国の民、あるいは神の国の市民として、ひたすら生活しなさい」という、これから説明しますが、かなり能動的、積極果敢な言葉となっています。

ギリシヤ人にとって、「ポリス」とは単なる国のことではありませんでした。私たち日本人は、国へ

の忠誠と言っても、昔の軍国主義を思い出して、むしろ政治には無関心でいるほうが、静かに、幸福に生きていけます。個人の生活を自由に送ることを中心にしても、それだけの自由と豊かさが守られた環境にあるからです。しかし、今の日本人に分かり易く話すならば、ポリスは会社に近いでしょう。会社において勤めることによって、自分の生活がその会社によって決められるほど、強い忠誠が求められます。そして最近では希薄になりましたが、「家族」も忠誠を持たせている制度です。ポリスにおいては、その法律が自分の生活そのものであり、その慣習にも誇りを持っています。大事なものは、これが自主的だということです。スポーツ選手がその苛酷な練習を、強制的にされるのであれば、人権侵害ぐらいのものですが、しかし、彼はそれを選んで訓練を受けています。ですから、忠誠を誓い、それを自ら選んで行なっているのです。

そしてパウロはこの言葉を、キリスト者の生活に当てはめているのです。キリスト者が、御国の市民であるということです。そして、キリストがご自分の命を捨て、血を流してくださったことにより、その愛を受けて、感謝が溢れ流れ、この方を愛して、忠誠を誓う、つまりイエスを主とする教会に属していることを表明しています。ですから、私たちはキリストによって個人的に救われるために、召されただけでなく、キリストの体の一つになるようにも召されており、それゆえ新約聖書の使徒たちの手紙には、「互いに、これこれをしなさい」という、相互に行なう命令に満ちています。

したがって、私たちは二つの分野において、常に自分がここに属しているのだという強い忠誠意識を持たなければいけません。一つは、「普遍的な教会」です。つまり、聖霊が使徒たちに下ってから携挙に至るまで続いている、世界規模での教会です。そしてこの地上だけでなく、既に死んで天にいる聖徒たちとの共同の教会、普遍的な教会です。私たちが他の国々のクリスチャンの苦境に無関心であることはできません。そして自分の周りの事柄だけでなく、世界的に広がっている教会にも目を留めないといけません。そして教会の歴史において、例えば過去に迫害を受けた私たちの信仰の先輩など、大きな働きをした人々にも目を留めるべきでしょう。

けれども、パウロがここでもっと注目しているのは、「地域教会」です。ピリピにある教会に対して書いているので、互いに責任をもった関係をしっかりと持って、主に、また互いに忠誠を誓うことです。私たちが、「どこの教会ですか」と尋ねた時に、すぐに答えられる人は幸いですね。そして、その教会の牧師や、また知っている人に連絡しても、「確かに、この人は私たちの教会の人たちです。」と言ってもらえるほど、自分が知られていることが必要です。実質的にも教会生活を共有しているからこそ、知られているのです。このように、教会は組織です。組織というと否定的に聞こえますが、会社のような無機質な、機械的な組織ではなく、御霊によって生かされている、有機的な組織です。キリストの体と呼ばれるように、細胞と細胞が相互に機能している、有機的な組織です。

そして、教会は「民」あるいは「人々」でもあります。つまり、そこに人々がいる。だから、自分のことは差し置いて、その兄弟姉妹のために自分を犠牲にする。もちろん、それは嫌々ながらではなく、共に信仰のゆえに戦っている友として、喜んで犠牲を払う。自分の時間と、その能力を主の御霊

に導かれて、主にお仕えするのに用いるのです。私はこの前の日曜日、とてもうれしい光景を見ました。礼拝直後にある方が机に置いていたコーヒーがこぼれてしまったんですね。それで、ご本人は自分の服にかかったのでトイレに行かれましたが、他の兄弟姉妹がすばやく、その濡れてしまったところを拭いていきました。この姿を見て、「これが、互いに仕えるということだよな。」と思いました。別に申し合せたのではないのに、強制された訳ではないのに、一つになって動いています。

そして教会は、生きた共同体です。何か担当の奉仕をするということも、責任を受け持っているということでもとても大切ですが、そのような責任と共に、そこに生まれてくる結びつきが大事です。つまり、時間を共に過ごすことがいかに大切かということを知る必要があります。私たちの教会ではあまりしませんが、他のカルバリーチャペルの人々のフェイスブックには、トランプとかボードゲームとか、いろいろ遊んで時間を過ごしています。(私たちは尾瀬に遊びに行きましたね!)これもとても大事です。初代教会は、ほぼ毎日、家ごとに集まってパンを裂いていました。全てのものを共有している、という感覚です。

もし、このような密接な関係を持っていなければ、どうなるのでしょうか?大変なことになり、それぞれが傷つきます。なぜなら、自分の権利を優先させることになり、自分が正しいと思うことを行なうようになるからです。それは、士師記にあるような、敵に虐げられる、また互いに争うような痛々しい状況になるからです。なぜなら、次の節に書かれているように、私たちは戦いの現場にいるからです。実際の戦争にしても、スポーツのような戦いにしても、自分の都合や利益を優先させれば、たちまち他の人々が死ぬ、あるいは傷ついてしまいます。堅くキリストにあって結びついて、一つになっていることが死活的なのです。パウロが、エペソ 4 章の冒頭でこう言いました。「4:1-3 さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」

そして、この「ポリス」という言葉を、パウロがピリピという町の信者に対して使ったということは、とても大事です。ピリピはローマの植民都市でした。ローマ帝国の広がりを示す、私たちに分かり易く話すなら、「モデル都市」であります。その住民はローマ市民権を持っていました。そして、ローマ法が敷かれており、実践もされています。ローマの慣習も受け入れていました。ピリピ人たちは、自分たちがローマ人であることを誇りにしていました。したがって、パウロが受けた迫害というのは、そうしたローマの誇りからだったのです。「使徒 16:20-21 そして、ふたりを長官たちの前に引き出してこう言った。「この者たちはユダヤ人でありまして、私たちの町をかき乱し、ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。」

ですから、誇り高き市民文化がある中で、パウロは天を国籍とする市民文化の中で生きなさいと勧めたのです。「3:20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」私たちが、御国に属する者として生き

るのは、この日本社会の慣習に激しくぶつかるものがたくさんあります。そこで、私たちは「共に奮闘する」という要素が非常に重要になります。

2A 一つになる戦い 27b-28

1B パウロとのチーム 27b

27b そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、

一つになってしっかりと立つ、あるいは共に奮闘します。共にしっかりと立つ時に、まず必要なことは「責任関係」です。パウロは、「私が行ってあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。」と言いました。パウロが見て、聞いて、ピリピの教会についてはこうだと自信をもって言うことができるようにする仲であります。つまり、「私は見ているからね。」という説明責任のある仲です。ちょうど、スポーツのチームに監督がいるのと同じように、教会にも監督がいます。先ほど、「どの教会ですか」と聞かれて、すぐに答えることができるところにいるか、という話をしました。もう一つ、「あなたの牧師は誰ですか。」と尋ねられて、「この人です」と言える仲にあるか、ということです。

そして、この関係が、パウロとピリピの人たちにある愛に基づいていることに注目してください。パウロは、彼らに自分のことを書く時に、「キリスト・イエスのしもべ(1:1)」とだけ言えばよいことでした。なぜなら、彼の使徒職を認めていて、それに基づいて金銭をパウロに送っていたからです。そのように友のような仲にあったので、彼らによってパウロの監督を受けるのは容易というか、むしろしてほしいことでした。私の母教会、カルバリーチャペル・コスタメサで、月に一回、家庭集会のリーダーが集まる集会があります。カール・ウェスタランド牧師がその会を見ているのですが、その時にリーダーの一人が、「あなたがいてくれるおかげで、安心して家庭集会を開くことができます。見てくれていなかったら、恐ろしくて決してしていなかったことでしょう。」とっていました。これが健全な関係です。愛による尊敬です。自分で勝手に何かを行ない、誰にも伝えなくて、それで牧師や担当者から戒められるものなら、「なんで、こんな良いことをしているのに、監視されなければいけないのですか。」と感じる人は、チームで戦っているという意識がないことを表しています。

2B 福音の信仰 27b

そして、「霊を一つにしてしっかりと立ち」と言っていますが、その後に、心、あるいは思いを一つにして立っていると書いていることが大事です。思いを一つにする前に、霊を一つにしています。これはエペソ書 4 章の、「平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」と同じことです。私たちが、何か規則を作って、それでそれに従って動くのであれば、思いは一つにしているかもしれませんが、心が伴っていません。イエス様は、「御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。(黙示 3:6 等)」と言われました。個人に御霊が語られることもありますが、御霊が教会に語られる

のです。ですから、私たちは熱心に、聖霊を共に求めないといけません。私たちは東十条バイブルスタディで、聖霊シリーズの学びをしています。私たちのすることはみな、上から聖霊に注がれて、そして初めてそこにある一致を共有することができます。

そして私たちは、どうしても「共に立つ」ことができません。キリストにあって共に立つのではなく、自分が正しいと思うことでなければ立つことができないと思ってしまいます。特に、これは福音派、聖書信仰を持つ教会に目立ちます。自分たちが正しいと思っていることを、キリストにある戦いよりも優先するのです。そのことで、主がなされようとしている働きが、私たちの利益優先で妨げられていることが、多々あります。

そして、「心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており」とあります。ここの「心」は、「思い」のことです。パウロはこの手紙で、思いを一つにしていることの大切さを話しています。自分と、教会の指導者や他の兄弟姉妹と同じところに自分はいるかどうか？ということを感じることはとても大切です。これは別に、その人がすぐれて霊的にならなければいけないことを意味していません。信仰歴があまりない、教会に来たばかりだというような方でも、同じ思いを共有できます。それは知識ではなく、へりくだった霊にあるからです。主がここで働いておられるということを認める、そのへりくだりがあれば、その人は同じ思いを共有できます。

そしてここの「奮闘する」という言葉ですが、「競争や戦いに従事する」という意味があります。ですから、スポーツにも使われる言葉ですし、戦争にも使われる言葉です。ですから、私たちのキリスト者としての歩みは、個人プレーではなく団体プレーであること。独り戦ではなく、部隊における戦であることを知るべきでしょう。まず、私たちが戦いの中にいることを知ることは大事です。戦いというと、激しい迫害を受けている国であれば理解できるが、私はどこで戦っているのだろうと思われるかもしれません。それこそが、悪魔の惑わしです。実は、あまりにも空気のように当たり前になっていて、目の前にあるために、かえってそれが戦いだと気づいていないかもしれません。

キリストへの信仰を持つことによって、その生活が楽しい、また教会の一部になることができ、楽しいと思っている人は、その戦いで守られ、勝利しているからそう思っています。それは良い兆候です。しかし、キリストへの信仰を持つことによって、教会生活を始めることによって、周りの人々との軋轢ができた、また会社が大変な状況になっている、また教会内で、人間関係で苦しむなど、いろいろな、思い煩ってしまう問題が生じます。そして、教会自体が福音の真理ではなく、寄せ集め、サークルのように集まっている、という教会の実質の否定につながるような動きをしています。五月にアメリカから来た短期宣教の二人の姉妹は、「よくもこんな霊的に難しい国において信仰を持っているのは、本当にすごい。」と言われていましたが、その通りなのです。私たちの周りには、福音を福音でないものに変えてしまおうという、強い圧迫をいつも受けています。

そして、主にあって私たちはこの世の中に進出しなければなりません。「戦う」というのは、平和

裏に暮らしているクリスチャン村に、悪い奴がやって来てそいつから私たちが守られるように戦う、防衛戦争ではありません。そうではなく、この世に神の国が攻め入っている、侵略戦争に関わっているのです。主がこの世に光として来られました。主にあつてできること、あるいは主がなされたいと願っていること、まだまだたくさんあります。そこに至るまでに、私たちは奮闘しなければいけないのですが、激しい反対が来るのです。しかし、一体となって共に戦うのです。

エペソ 6 章には、霊の戦いのための武器を身に付けなさい、という命令があります。私はこれまで、自分の霊の戦いばかりを考えていましたが、実際のローマ兵の戦闘は、部隊によるものです。百人隊長という言葉があるように、百人単位の軍団がありました。ローマ兵は自分の盾を前方と上方、また左右に壁のようにスクラムを組み、亀のようにのろのろと前に進む隊列を組みます。テウトドと呼ばれますが、こうやって部隊で動くことによって、初めてサタンに対峙することができます。



3B 反対者への徴 28

28 どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。

ここの「脅されてたじろぐ」というのは、ギリシヤ語においては「総崩れ、大敗走」ということです。もっと具体的には、馬が驚いて、制御できないほどどっと逃げ出すことを示しているそうです。ですから、どんどん私たちに火の矢が襲ってきます。私たちはいろいろなことが起こっても、「それでたじろいではいけない」ということが大事です。

そして、私たちがたじろぐことがないことによって、「彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示す」とあります。まず、私たちの救いを示すことについて考えてみましょう。これは、私たちが確かに神が救ってくださったということ、反対者からの攻撃に耐えていることによって、それで示すことができる、というものです。皆さんが、イエス様を信じているということ、これ自体が、反対者にとっては滅びとなります。どんな世における力があっても、それでもイエスを主として心に受け入れました。しばしば日本の人たちはクリスチャンを見て、「優しい」ということは言われません。未信者でも、優しい人はたくさんいますから。けれども、「芯がある」とよく言われますね。何があってもブレない、その確信を心に持っている、ということでもあります。

ある注解書に面白い例えがありました。コーヒーに角砂糖を入れます。普通であれば、数分すれ

ば溶けて見えなくなってしまう。しかし、数分後もその白い塊が浮かんで残っている、という例えです。こんなことは、人間の業ではできません。ですから、すべて「神によること」であります。まさに、このように私たちが自分を取り囲む社会に溶け込まず、そのままキリスト者としていることは、神の聖霊の力、その支える力によるのです。

そして、反対者にとっては、このことは滅びの徴です。なぜなら、彼らの武器である恐れを私たちに植えつけるのに失敗したからです。そうならば、後は滅びしかありません。ここで言っている滅びとは、神によって永遠の裁きを受けることです。反キリストに対して使われています(2テサロニケ 2:3)、イスカリオテのユダ(ヨハネ 17:12)、偽教師たちにも使われています(ピリピ 3:19、2ペテロ 2:1)。私たちが霊の戦いをするのは、その救いを救いとして喜び、楽しんでいること、そのものであります。敵の面前で、その攻撃に対して私たちが主をほめたたえることができれば、彼らは面目を失うだけなのです。ネヘミヤ記の 6 章で、ネヘミヤたちが城壁を完成させた時のことを思い出します。「ネヘミヤ 6:16 私たちの敵がみな、これを聞いたとき、私たちの回りの諸国民はみな恐れ、大いに面目を失った。この工事が、私たちの神によってなされたことを知ったからである。」

3A 共に受ける苦しみ 29-30

1B 苦しみという賜物 29

1:29 あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜わったのです。

ここで、クリスチャンでさえあまり聞かない、神の約束があります。私たちがイエス様を信じたことのできたのは、神からの賜物です。これは私たちはよく知っています。それだけでなく、「キリストのための苦しみをも賜わった」ということ、キリストのゆえ苦しむことも、神からの賜物であるということです。私たちは生活の中で不都合なこと、試練や困難がありますと、それは神が自分を怒っているのだと勘違いしてしまうことがあります。いいえ、その正反対で神からの賜物なのです。自分が信仰をしっかりと持っているこそ、降りかかったことなのです。パウロは言いました。「2テモテ 3:12 確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」

私たちは、イエス様をもっと知りたいでしょうか？ イエス様を信じて、この方に結ばれた者になった、この方に従う者になりました。それならば、この方を知る時に、この方の苦しみとその甦りも知ることになります。「私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにもあずかることも知って(3:10)」そのことによって、この方と交わりをすることができます。ですから、キリストを信じるということによって、その苦しみにあずかることは、主を愛してやまない人によっては賜物なのです。使徒たちは迫害を受けた時に、喜びました。「使徒 5:41-42 そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。」

2B パウロと同じ戦い 30

1:30 あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。

共に戦うことは、共に苦しむことを意味します。私たちは、共に戦うからこそ、同じ所で痛み、その痛みの共有の中で兄弟の絆が生まれます。パウロは、ピリピの人たちに、自分がピリピにいた時にシラスと共に鞭打たれ、牢に入れられたことを思い出させています。そして、今、ローマにいて牢に入っています。これらの戦いが、遠くにいるパウロだけでなく、また使徒であるパウロだけでなく、あなたがたも同じように戦いをしているのだよ、という励ましと慰めです。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。(1コリント 10:13)」ですから、私たちはこうやって互いに励ますことができます。どの信者も、教会で共に仕え合っている私たちは、それぞれの場で戦っています。そして敵の火矢によって傷を受けています。ゆえに、自分のことのために祈るだけでなく、兄弟と姉妹のために祈ることができるのです。同じ戦っている仲であります。

そしてここで使われている「戦い」の言葉は、イエス様がゲッセマネの園で祈られていた時に使われています。「ルカ 22:44 イエスは、痛みもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」イエス様が痛み悶えられた、その痛みは、ご自身の意志を父のそれに明け渡す痛み悶えです。主の御心のままに、と言うことのできるような、ご自分を捨てるまでの痛み悶えです。私たちが苦しんでいる時、戦っている時に、主はすでにその痛みを経られました。したがって、主は私たちが弱い時、助けることができます。そしてその戦いにおいて、力を与えることがおできになります。

こうして私たちは1章を読み終えました。主にあって喜ぶ、キリストが宣べられることを第一優先にする、この姿勢が私たちに戦いの最中に喜びを与える源泉としています。そして、私たちが御国の市民として恥ずかしくないふるまい、また一致、そして大胆さを与えてくれます。ですから、どうか御霊によるチーム、御霊による部隊にいるのだということを忘れないでください。そうすれば、敵が滅びるしかないという圧倒的な勝利の中に入れるのです。2章からは、そのチームワークにおいて妨げになること、すなわち「自分」というものを取り扱います。自分の都合、自分の利益、自分の正しさ、こうしたものがあると、霊の戦いで重要な一致というものを壊してしまうのです。